

『扁鵲倉公列伝割解』の研究

現伝本における書き入れおよび旧蔵者

宮川 浩也

日本医史学雑誌第四十六巻第四号 平成十一年八月二十三日受付
平成十二年十二月二十日発行 平成十一年十二月十一日受理

〔要旨〕江戸時代中期に、尾張藩医第五代浅井凶南は、『史記』扁鵲倉公列伝の注釈『扁鵲倉公列伝割解』をあらわした。扁鵲倉公列伝単独の注釈のはじめとなるもので、研究史においては重要な位置にある。全国の図書館（個人蔵を含む）に所蔵される三十二本の『扁鵲倉公列伝割解』を調査した結果、その中の八本に大量の書き入れを確認した。特筆すべき事は、第七代の浅井正封、第八代の浅井正翼、第九代の浅井正賛の書き入れが見つかったことで、浅井家がいかに重視していたかを推測することができる。『扁鵲倉公列伝割解』本体の研究とともに、これらの書き入れにも重点的に研究することは、『史記』扁鵲倉公列伝研究の要務であろう。

キーワード——浅井凶南、尾張藩医、史記、扁鵲倉公列伝

一、はじめに

『扁鵲倉公列伝』はいうまでもなく『史記』卷一〇五の医家の列伝第四十五で（以下「扁倉伝」と略す）ある。『扁鵲倉公列伝割解』（以下「割解」と略す）とは尾張藩医浅井凶南（一七〇六〜一七八二）の扁倉伝の注釈書で、長子の正路（一七

三四（一七八一）の補注を加えて、明和七年（一七七〇）に刊行されたものである。この『割解』は扁倉伝単独の注釈の嚆矢と目され、室町時代の『史記』研究と江戸時代後期の『史記』研究の中間点に在って、扁倉伝研究史においては重要な位置を占める。

『割解』は岩波の『国書総目録』（以下『国書』と略す）によれば一六カ所の図書館に所蔵される。『国書』以外では四カ所の所蔵を確認した。これらの書き入れ状況の調査が終了したので報告する。

二、調査方法

各図書館の目録には、書名・著者名・刊行年・書肆名などが記されるだけで、本研究の目的である書き入れに関する情報はほとんど取りあげられていない。したがって、実際に図書館に足を運び実見し、書き入れがあるかどうか、その量は、誰の書き入れなのか、これらについて調査した。遠方であれば事前に問い合わせし、所蔵されているか、書き入れがあるかを確認し、必要であればやはり足を運んで実見した。

調査した図書館は次の通りである。

（一）次の首都圏の図書館は直接足を運び実見し、書き入れの有無、蔵書印などを確認した。なお最後に記した井上書店は古書店である。この中で重要なものは複写した。

国立国会図書館

東京国立博物館

早稲田大学図書館

東京大学総合図書館

東京大学医学部図書館

慶應義塾大学三田メディアアセンター旧館

無窮会図書館

研医学会図書館

文教大学越谷図書館

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

井上書店

(2) 次の図書館は、事前調査の結果書き入れがなく、重要ではないと思われたので実見していない。

西尾市立図書館岩瀬文庫

名古屋市立鶴舞中央図書館

刈谷市立刈谷中央図書館

(3) 次の図書館は、事前調査の結果、重要と思われたので、足を運んで実見し、必要なものは複写した。

天理大学附属天理図書館

京都大学附属図書館

(4) 次の図書館には複数本が所蔵されているので(目録上)、確認の意味でも、足を運んで実見した。

神宮文庫

武田科学振興財団杏雨書屋

(5) 次の図書館は、事前調査の結果、必要部分の複写で用が足りると思われたので、複写を請求した。

名古屋市蓬左文庫

(6) 次の図書館は、事前調査の結果、上冊が所在不明とのことだったので、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究

部所蔵の複写に依った。

東北大学附属図書館

三、成立と著者

著者の図南は、医系浅井の第五代で、幼名は冬至郎・周北といい、頼母と称し、字は惟寅、図南と号した。浅井家では、儒家が『大学』『論語』『中庸』『孟子』を四書と呼ぶのになぞらえて、『内経』『傷寒論・金匱要略』『難経』『扁倉伝』を四部書としている。

『内経』『難経』の祖は第三代の正純（一六四三〜一七〇五）、『傷寒・金匱』の祖は第六代の正路とされている。扁倉伝の祖が図南である。この四部書は、第七代正封（一七七〇〜一八二九）の時に設けられた教場、静観堂講舎（後に医学館と改称される）において講義された。『割解』はその時のテキストである。

浅井氏は京都で医業を行っていたが、第四代の正伸（一六七二〜一七五三）が尾張公の招聘に応じて、禄四〇〇石をもって侍医となる。初め、図南は、父祖以来の京都での盛名を守るために京都で医業を継続したが、正伸の没するに及びやむなく父業を継ぐことになる。『割解』が成った明和三年（一七六六）にはすでに尾張にあった。『割解』の成立については、図南の自序に詳しい。

補注をなした正路は、図南の第一子で、幼名は藤太、後に周碩と改め、字は由卿、南溟・朴山と号した。京都の旧宅を改造して住み、のちに宮廷医家となり、和氣姓を名乗る。『割解』を校正し、補注を加えたのはこの頃である。名に冠せられた「請即通事舍人上総別駕」という官途は、跋文の年（一七六九）にはすでに宮廷医家になっていたことを物語る。正路と『割解』の関わりについては、彼の跋文に詳しい。

四、『割解』の版本について

『割解』は浅井図南の注釈書で、明和三年（一七六六）の成立、明和六年（一七六九）の開彫。正路の補注を上欄に追加彫刻して、明和七年（一七七〇）に上梓された。二巻二冊。校閲は門人の源龍なる人物が担った。後述する浅井正贄の注記によれば、塾長の鈴木秀慶である。

図南自序五葉、上巻（扁鵲伝）一九葉、下巻（倉公伝）四二葉、正路跋文四葉、都合七〇葉。図南序文、本文、図南注文には訓点が含まれているが、正路跋文、正路注文には訓点はない。自序は明和三年（一七六六）、正路跋は同六年（一七六九）。

左右单边、無界、每半葉一〇行、行一八字。図南注文は小字双行、行一八字。頭注として正路注が小字二四行、行五字。版心には「扁倉伝割解」、上象鼻に「明和六年」とある。「恒」字を欠筆する。

版には、明和七年版（以下明和版と略す）と嘉永元年版（以下嘉永版と略す）の兩種がある。その違いは料紙の大きさと奥付で、内容はまったく同じである。¹⁾

① 料紙

明和版の料紙はタテ約二七・五×ヨコ一九糎、嘉永版はタテ二五×ヨコ約一八糎で、明和版がひとまわり大きい。

② 奥付

明和版の奥付は、「每部有図章、若無係偽刻」と版元印を押す枠を設定している。次行に「明和七年庚寅六月／平安書林／林九兵衛／林権兵衛／林伊兵衛」と発行年・発行者名を記す。

嘉永版は、版元印の枠を廃して、発行年「明和七年庚寅六月／嘉永元年戊申冬求版」と、「書林／江戸日本橋通南二丁目 山城屋佐兵衛／尾州名古屋本町通 莢屋藤兵衛／京都二條通堺町 林芳兵衛／大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜

兵衛」と発行者名を列記する。

③版元印

明和版には版元印が押される。版元印は三種が確認できた。無印のものもあるから、版元印で区別すれば、明和版は四種に分類できる。²⁾

a 「桑陰杯陽藏版」

無窮会神習文庫本・文教大学池田文庫本・刈谷中央図書館本の三本。

b 「桑陰藏版」

東京大学総合図書館寺田望南旧藏書・東京大学医学部図書館本・天理大学付属図書館本・研医会本の四本。

c 「平安文錦堂藏」

東京大学総合図書館浅井正賛旧藏本ほか多数。

五、書き入れおよび旧藏者について

書き入れと旧藏者について報告する。図書館の記載順は『国書』に準じ、『国書』未収は順不同である。図書館名の下
の(一)は資料請求番号である。

(一)『国書』収載明和版

1 国会図書館(一三九・一二二)

書き入れなし。

2 東京国立博物館(和二八)

書き入れなし。

3 京都大学附属図書館(七〇一・へ・二)

「百々復太郎寄贈」の蔵書印があり、これは百々鳩窓(一八〇八〜一八七八)のもので、彼の遺志により第五子の復太郎(一八四九〜一九二六)が寄贈したものである。

書き入れなし。

4 京都大学附属図書館富士川文庫(へ二二)

富士川文庫は近代日本医史学の創始者である富士川游(一八六五〜一九四〇)旧蔵本である。「久昌院蔵書」・「奈須恒徳」の蔵書印があり、奈須恒徳(一七七四〜一八四二)の旧蔵書である。奈須家は恒徳のあとには、その子の信徳が継いだ。が明治九年(一八七六)に没した。その子に吉備丸と称する画家がいたが消息不明。ただ最後にくみという女性が残り、小島家に寄寓した。奈須家の最後まで残った蔵書は、この小島家から富士川游に譲渡されたという。⁽³⁾

奈須恒徳(二七七四〜一八四二)、字は玄虫、号は柳村、本姓は田沢氏で、幕府医官の奈須氏の養子となる。恒徳ははじめ江戸医学館に学んだが、その学風に満足せず、祖の奈須恒昌が学んだ曲直瀬流の医術を尊重し考究した。著は『本朝医談』『本朝医談二篇』ほかすこぶる多い。

書き入れは、新たな知見を博引傍証して天頭に注している。凶南注の不適当な箇所は線を引いて抹消していて、批判的に読む。

恒徳の博覧ぶりが窺われる箇所もある。たとえば、「七表八裏九道ノ名目ハ経ノ中ニハ無キ故、叔和ヨリモ後ノ人シタリト一華和尚扁鵲倉公伝ヲ講セラル時ノ玉フ、然トモ医書大全ニ云タル上ハ不入コトソ、百会ヲ三陽五会ト云ソ、五会ヲ一華ハ別々ニ口得ラレタリ、右月海録ニ見タリ、扁倉伝ヲ講スルコト永正以前ヨリ也、近時ニ初ルニアラス」(上一表)という一文は興味深い。

一華碩由(一四四七〜一五〇七)は、博多の建徳寺に覚晶庵をかまえて学徒を教導した臨濟宗の僧である。永正以前と

いうのは、没年の永世四年以前を意味している。室町時代後期に、彼が扁倉伝を講義していたことは興味深い。『史記抄』を著した桃源（一四三〇～一四八九）、いわゆる幻雲附標を書き入れた月舟寿桂（一四六〇～一五三三）、彼らとほぼ同じ時代である。『史記』の注釈はこのふたり以外に知られていないから、一華碩由が扁倉伝を講義していたということは重要な指摘である。ちなみに「月海録」とは、竹田秀慶（字月海、？～一五二八）の『月海雜録』を指す。

また「直江山城所蔵史記アリ、扁倉伝ノ書入レニ蕉抄ヲ引ケリ、蕉ト云人ノ抄注アリシナリ、幻雲ノ説モ又多ク載タリ」（上二表）とあり、直江山城守兼統（一五六〇～一六一九）が所蔵していた南化本のことは知っていたらしい。直江家は彼一代をもつて断絶しているから、南化本がその後どのような経緯をたどったかは知れない。南化本を模刻した嘉永影宋本の多紀元堅（一七九五～一八五七）の嘉永二年（一八四九）の識語には米沢侯所蔵と書かれているから、そのころすでに上杉家に移譲されていた。

武田信近の署名がある「腹痛天矯」なる一枚の原稿が挟まれている。竹田信近なる人物は特定できなかつたが、「信」を関する医家には竹田信成（一六二六～一七〇六）や竹田信郷（一七〇〇～一七七三）などがあるので、おそらくその一門かと思われる。

5 京都大学附属図書館富士川文庫（へ二三）

蔵書印は「平田氏記」で、江戸後期の国学者の平田篤胤（一七七六～一八四三）の蔵書印である。

序文・上巻・下巻（一葉～二四葉）・跋文に朱墨による句点が施されるだけで、文字による書き入れはない。

6 早稲田大学図書館（リハ・二三七・一～二）

蔵書印は「椿氏存誠閣蔵書」・「岡氏蔵書」であるが未詳。

わずかに書き入れあり。

7 東京大学総合図書館鶯軒文庫（V一〇・三七五）

鶚軒文庫は東大教授の土肥慶蔵（一八六六～一九三二）旧蔵書である。

多量の書き入れがあり、「嘉永甲寅十二月七日標注功畢、尾張医員藤正贇」（後序四丁表）なる識語により、浅井第九代正贇（一八二八～一八八四）の書き入れとわかる。

正贇は、幼名を吉太郎といい、後に儀一郎と改め、字は思文、九阜と号した。六歳で奥田鳳文に儒学を学んだのをはじめとして、多くの儒者から経学の教授を受け、河田寿安からは脈学を学んでいる。十七歳で医学館学生の監督となり、二十歳で医学館代講を勤めた。嘉永三年（一八五〇）京都医心館で『素問』を講義し、その学識は一世に認められる。著書は四十一部に及ぶ。識語によれば、書き入れを終えたのは嘉永七年（一八五四）である。二十七歳。

欄外（天頭）に書き込まれた評注のうち、「祖公云（曰）」と引用されるのは第七代正封の書き入れで、その他は多紀元簡の『扁鵲倉公伝彙攷』（以下『彙攷』と略す）の引用、そして正贇の自らの注釈である。傍注にも正封注が引かれるが、ここでは「祖公曰」を略す。傍注には正贇も多いから、正封注と正贇注との区別は、正封書き入れ（無窮会神習文庫本）が不可欠である。

結果としては、浅井家の扁倉伝注釈の集大成的な書き入れといえる。誤植を訂正し、正封による篇名明記を補って、『割解』のさらなる補完を試みたものである。正贇の注釈は、考証学的手法で博引旁証に富む。

8 東京大学総合図書館鶚軒文庫（V一〇・三七四）

「読杜艸堂」の蔵書印があり、これは明治の蒐書家寺田望南（生没年未詳、昭和初期まで存した）の蔵書印である。書き入れなし。

9 東北大学附属図書館狩野文庫（第九門二一八二一）

狩野文庫は、明治から昭和にかけての哲学者、狩野亨吉（一八六五～一九四二）の旧蔵書。希代の図書収集家として有名である。「喜多村氏蔵書之印」の蔵書印は、喜多村直寛（一八〇四～一八七六）のものである。

多量の書き入れがある。「辛卯十一月念八日読過／弘化丁未六月晦日于医学講授了 直寛」なる識語(下巻四二表)によれば、喜多村直寛(一八〇四～一八七六)の書き入れで、天保二年(一八三一)に家塾で講読したときと、弘化四年(一八四七)に医学館で扁倉伝を講義したときのメモであることがわかる。

喜多村直寛、字は士栗、号栲窓、晩年には香城と号した。儒学を安積良斎に学ぶ。文政四年(一八二二)に医学館に入り、授読に選ばれ、天保十二年(一八四二)には医学館教諭(講書)となった。著は『傷寒論疏義』『金匱要略疏義』『黄帝内经素問講義』など数多く、『医方類聚』『太平御覧』などの出版事業にも力を注ぎ、學術的寄与度が極めて高い。

上巻の識語に「天保辛卯仲冬、講斯書於家塾、因執滕氏割解、及劉氏彙攷、対読一過、寛誌」(上巻一九表)とあり、天保二年(一八三一)に家塾の学訓堂で扁鵲倉公列伝を講義し、その時に「滕氏割解」と「劉氏彙攷」を参考にしたとある。「滕氏割解」とはいうまでもなく『扁鵲倉公列伝割解』のことである。「劉氏彙攷」とは多紀元簡の『彙攷』を指すが、刊本は嘉永三年(一八五〇)の出版であるから、直寛がみたのは稿本である。⁽⁴⁾

下巻には「辛卯十一月念八日読過」(下四二表)とあり、同年(天保二年)の十一月に講読が終ったと思われる。さらに「弘化丁未六月晦日于医学講授了直寛」(下巻四二表)という識語を並べる。弘化四年(一八四七)に医学館で講義したと書かれている。欄外の注釈はこれらの講義のメモと考えられる。

医学館における扁倉伝の講義については、『多紀氏の事蹟』にもふれられている。嘉永元年(一八四八)十月十一日から翌年の五月二十六日の間に稲葉文定が、安政元年(一八五四)十月二十一日から同年の十二月六日の間に渋江抽斎が、それぞれ扁倉伝を講義したことが明らかになっている。直寛の弘化四年(一八四七)の講義は稲葉文定に先んずるものである。いずれにしても、短期間の講義だったようである。⁽⁵⁾ ちなみに、山田業広(一八〇八～一八八二)も万延元年(一八六〇)に医学館で講義したらしく、その成果は『扁倉伝集解』として成っている。⁽⁶⁾

書き入れなし。

11 名古屋市立鶴舞中央図書館

現蔵せず、所在不明。同図書館の話では、昭和二十年三月十九日の空襲で焼失したのではないかという。旧所蔵番号は「浅へー七」。

12 名古屋市蓬左文庫 (六一九九)

わずかの書き入れがあり、凶南自序と正路跋文に見られる。

13 神宮文庫 (四七九)

書き入れなし。

14 天理大学附属天理図書館 (二八二・二一二七)

「棲鸞堂図書記」印がある。誰の蔵書印かは未詳だが、同館所蔵の『隄防溝洫志』(六一五―五)には「大正十年七月下浣 棲鸞堂主人識」との識語があり、近代の人物であることだけは知れる。

比較的多量の書き入れあり。原稿用紙一枚の挟紙に識語があり、次のように書かれている。

「扁倉伝割解序発端弁 扁ハ扁鵲、倉ハ倉公、此ノ扁鵲倉公ノ伝ハ即チ司馬遷ノ史記ノ列伝ニアル、彼ノ上古ノ黄帝岐伯ノ時代ヨリシテ以後此扁鵲倉公ホドノ名医ハ外ニハナイ、黄帝岐伯ニツイデ中古ノ名医ト云ガ此扁鵲倉公也、時ニ此ノ割解ノ義ハ当家ノ先師ノ作也、即チ此序文ノ内ニ扁倉伝ノ注ヲイタサレタコトガホド記テアル、割解ト云字義ハ割皮解肌ト云文字也、物ノウハ皮ヲヒライテ未ダタダ中迄ニハ至ラヌト云、畢竟ハ謙退卑下ノ詞也、即チ序文中ニアル通り此扁倉ニ伝ノ義ハ史記内ニアルコト故ニ漢ノ代ヨリ以来今ニ至ル迄ニ医流ノモノハ儒書ノ事トナシテ吟味ヲ加ヘズ、又儒業ノモノハ扁倉ニ伝ノ義ハ医分ノコトトシテ吟味ヲトゲナシ、ソレ故ニ儒流医流相ヒユツツテ此ニ伝ヲ吟味イタサナシ、サルニ因テ此ニ伝ニ於テハ明ナル所ノ注解之文ガナカツタ、然ル処ヲ先師凶南先生ガコトノホカ此伝ニ

骨ヲ折ラレテトウトウ此注解ガ出来タ、是ニヨツテ此方ノ学流ニヲイテハ、内経難経ニツイテ此伝ヲ尊信イタシテ講習等ヲスルコト也、尚又詳カナル義ハ序文中并ニ注文ニヲイテ詳ニ聞ヘルトアルコト也、乙巳二月七日夜開講」

この中の、「此ノ割解ノ義ハ当家ノ先師ノ作也」と「乙巳二月七日夜開講」とによって、書き入れた者を特定できる。つまり、浅井家の誰かの、乙巳の歳の書き入れであることがわかる。

まず、「乙巳」の歳は、天明五年（一七八五・弘化二年（一八四五）のいずれかである。

天明五年（一七八五）時点で浅井家で生存しているのは、正封と正時がいる。第七代正封が十六歳で、すでに尾張藩医を襲っている。彼にはすでに書き入れがあり（無窮会神習文庫本）、これと比較しても継承性はみられない。第六代正路（京の朝廷医）の跡を襲った正時（二七七三〜一七九八）は、天明五年（一七八五）には十三歳である。年齢からみて正時とは無関係であろう。つまり、天明五年（一七八五）は否定できる。

弘化二年（一八四五）で在世しているのは、正翼と正贇である。第八代正翼（一七九七〜一八六〇）は、弘化二年の時は四十九歳であるから一番理想的な年齢である。第九代正贇（一八二八〜一八八四）は弘化二年の時は十八歳である。彼は天保十五年（一八四四）には医学館の学生監督となり、弘化四年（一八四七）には医学館代講になっているから、可能性はないわけではないが、彼にすでに書き入れがある（東京大学総合図書館鸚軒文庫本）。これと比較しても継承性がみられないし、内容的にも差がある。以上の二点から、書き入れたのは浅井第八代の正翼である可能性が高い。

また、正封の講義を正翼が筆記し正贇が補考を加えたものに、『金匱要略口訣』・『方輿口訣』がある。両書に「発端弁」という一項があり、この扁倉伝の識語にも「扁倉伝割解序発端弁」とあるのは、関係が強いと考えられる。以上を総合すると、書き入れ者は正翼とみなすことができる。

正翼（一七九七〜一八六〇）は幼名を桃太郎といい、後に董太郎と改め、字は亮甫、紫山と号した。古医方本草に造詣深く、その名遠近に聞こえた。天保二年（一八三一）に静観堂が医学館に改称される。

書き入れ自体は大量というほどではないが、図南の注釈に対して補注を加える形式で、細かな文字で傍注される。新たな自説はない。

15 無窮会図書館神習文庫(五五三八)

神習文庫は、幕末から明治にかけての国学者、井上頼罔(一八三九〜一九一四)の旧蔵書(蔵書印は「井上氏」)である。多量の書き入れがある。「癸亥正月廿二日、開筵日書」(序一表)・「文化癸酉仲春廿一日西窓下記」(下巻四二表)なる識語があり、享和三年(一八〇三)と文化十年(二八一三)のところに書かれたものとわかる。

識語の「余意、医之有此書云云」(序一表)を、浅井正贇の書き入れでは(東京大学総合図書館鸚軒文庫V一〇・三七五)「祖公、医之有此書云云」と引用していることからみて、浅井第七代正封(一七七〇〜一八二九)の書き入れとみなすことができる。また、正贇の書き入れの中の「祖公曰」は、正封の書き入れを移抄したものである。正贇が正封を「祖公」というのは『素問記』『靈枢窺』などにも見られる。⁽⁸⁾

正封(一七七〇〜一八二九)は浅井氏第七代で、幼名は小藤太、長じて平之丞と称し、字は堯帆、貞庵・榊園と号した。政直の養子の正準は、義父政直に先んじ没したために、正準の子の正封が継ぐべきところ、年少のゆえに、政直が再び継ぐことになるが、正封は正路の養子になる。政路没して、十三歳にして家督を継ぐ。文化年間に、医学を講授する学舎、静観堂講舎を造り、扁倉伝の講義なども行う。正封の書き入れは、この時の講義録である。

扉裏の識語に「余意、医之有此書、亦如儒之有中庸春秋也、祖君表章之功、宜与程朱侔也、如内经等書、規矩議論之道也、此書独以人体之施之於事、誠实用見跡之教也、当与傷寒内難、並為万世之經也、此旨五六年前之本於習齋一軌之說。癸亥正月廿二日開筵日書」とあり、癸亥(一八〇三)の年の正月二十二日の開講の時に記したものである。

図南・正路の注釈をさらに発展させ補完を試みたもので、家学の累積を目的としたものである。こうした浅井の試みは、『素問』や『靈枢』にも見られるものである。

「素問曰」「靈樞曰」とあれば篇名を明記するなどは、補完を目的としたものである。正封注のもう一つの特徴は、本文の校勘である。凶南がどのようなテキストを用いたのかは後述するとして、正封は彼の見た『史記』のテキストとの異同を記録している。また、『割解』に引かれる『韓非子』喻老篇にも校勘を加えている。清朝考証学で重んじられた校勘の学が、すでに正封に達している。

(二) 『国書』収載嘉永版

16 京都大学付属図書館富士川文庫（へ二四）
書き入れなし。

17 慶應義塾大学三田メディアセンター旧館（七四―二三―二）
「和田龍一郎大正十五年十一月十日寄贈」のシールあり。
書き入れなし。

18 早稲田大学図書館（リ八・二五三三・一〇二二）
蔵書印「平原氏図書」は未詳。

朱墨による訓点が若干ほどこされるほか、書き入れなし。

19 東京大学総合図書館鶚軒文庫（V―一・二〇四）

「南葵文庫」の蔵書印があり、これは貴族院議員徳川頼倫（一八七二―一九二五）が設立した私立図書館である。また「島田氏雙桂園藏書記」があるが、これは東大教授の島田重礼（篁村、一八三八―一八九八）の蔵書印である。書き入れなし。

20 武田科学振興財団杏雨書屋（杏一―一五三）

書き入れなし。

21 武田科学振興財団杏雨書屋 (乾二五二)

乾々齋文庫は慶応大学医学部教授の藤波剛一 (一八八〇〜一九四二) の旧蔵書。富士川游とともに日本医史学会の創立者となる。

書き入れなし。

22 無窮会図書館平沼文庫 (二〇三三五)

平沼文庫は、無窮会創立者の平沼騏一郎 (一八六七〜一九五二) の旧蔵書である (蔵書印「平沼氏蔵書記」「機外文庫」あり)。蔵書印「槃山文庫」は早稲田大学教授の川合孝太郎 (一八六四〜一九四〇) の蔵書印である。
書き入れなし。

(三) 『国書』収載刊年不明本

23 京都大学付属図書館富士川文庫

京都大学付属図書館には四本、つまり明和版 (三本) と嘉永版 (二本) の所蔵を確認したが (上述)、『国書』のいう刊年不明本は確認できなかった。

24 刈谷中央図書館 (W四〇一五)

『国書』は刊年不明とするが、現蔵本は明和版である。
書き入れなし。

(四) 『国書』不収明和版

25 文教大学越谷図書館池田文庫 (二二一・〇一—s h 二五—A)

池田文庫は池田四郎次郎(一八六四—一九三三)の旧蔵書(子息英雄氏の蔵書も含まれる。蔵書印は「浪華池田氏図書館」)。書き入れあり。

識語が二種ある。ひとつは、文化七年(一八一〇)の『彙攷』の多紀元簡識語である。もうひとつは「天保丙申之冬写、存誠藥室、久徴」(下四二裏)である。これは書き写した者、つまり「久徴」なる人物の天保七年(一八三六)の識語である。「久徴」については未詳。

書き入れはすべて多紀元簡の『彙攷』を書き写したものである。『彙攷』は、元簡の没後、多紀元堅が補注を加え嘉永二年(一八四九)に刊行されている。したがって、この書き入れは原稿本の『彙攷』をもとにしたものとわかる。『彙攷』の研究の一助となるだろうが、『割解』の研究にはさほど重要ではない。

26 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所蔵本

わずかに書き入れあり。⁽⁹⁾

27 井上書店本

井上書店の『古典籍目録』(三四号)に掲載されたもので、平成十一年四月に拝見させていただいた。書き入れなし。

28 東京大学医学部図書館(V一一・h七)

蔵書印に「仲得」「松田謙印」「謙書記」があるが、松田某なる人物は未詳。書き入れは次の四条で、その中に「謙按」とあるから、松田氏の書き入れと知れる。(一)内は被注釈字。

- ・序一表頭注「扁倉伝、即司馬遷史記列伝ニ見タリ／(割解)卑下之辞也」
- ・上一三表頭注(説苑狗)「狗、結艸為狗、解厭也、祭者所用、已則棄之」

- ・上二三裏頭注(説苑跣)「跣、徒足履地、尚書跣弗視地蹶用傷、謙按スアシノコト乎」
- ・下五表頭注「上経下経素問病能四十六ニアリ／漢書芸文志有五音奇、蓋奇秘之数非常術也」

29 武田科学振興財団杏雨書屋(杏四四一六)

蔵書印「有不為齋」は幕末から明治にかけての京都の儒者伊藤介夫(生没年未詳)の蔵書印である。¹⁰⁾
書き入れはわずかである。

・上九表天頭(正路注咤)「咤、叱怒也」

・下一表天頭(正路注焉)「馬」

・下一裏行間(図南注切齒)「ハギシミスルコト」

・下八裏天頭(正路注雉経)「晋語註雉経頭／搶而懸也」

・下八裏行間(図南注佶)「似本字」

・下八裏行間(図南注濼)「シヨウ、ウゴク」

・下九裏天頭(図南注纂)「纂交纂之義／謂兩便争行之／所即前後二陰／之間也」

30 武田科学振興財団杏雨書屋(渡一)

武田科学振興財団の本草学者渡辺幸三(一九〇五〜一九六六)の旧蔵書。

書き入れなし。

31 研医会図書館(請求番号なし)

書き入れなし。

(五) 『国書』不収嘉永版

32 文科大学越谷図書館池田文庫 (二二二・〇一—sh一五—A)

池田文庫は前出。

見返しに「読扁鵲伝割解」と題する識語がある。

「往年、友人村山士謙請余一閱浅井図南扁倉伝割解、而論其得失、会其没不果、頃者美濃医河田氏携示此書、質其疑義、因読之一過、略举其事之失考、文之誤解者而更正之、若其方伎、則余之所不知、不敢妄論也、憾不作于士謙于九原、而共商推焉爾、文化丙寅孟夏、猪飼彦博識」

続けて同じ書体で「凡欄外朱書、係于猪飼氏説」と朱書する。

この識語から、文化三年(一八〇六)の、猪飼彦博(一七六一—一八四五)の書き入れと考えられる。ただし、次の理由から、一部が猪飼氏の按語で、一部は他の者の注釈とみなされる。

①猪飼の『読扁倉伝割解』は、『猪飼氏旧蔵書』の巻二〇六および二〇七に収められている。巻二〇六所収書には「文化三年丙寅中夏、門人紀州加勢田西村三秀写」なる識語がある(巻二〇七所収書には識語がない)。試みに巻二〇六と池田文庫本の猪飼按語を比較してみると、池田文庫本は巻二〇六の一〜二割程度しかなく極めて少ない。

②また、見返しの「凡欄外朱書、係于猪飼氏説」なる但し書き通りで、朱書されたものが猪飼氏按語で、墨書されたものは猪飼氏の按語でないといえる。

③また、池田本に「恭按、穰穰全、除殃求福之義、史記滑稽伝、道傍有穰田者、注謂為田求福穰、周礼天官女祝、注卻変異曰穰、説苑作壤、不可従」と朱書された按語があり、これに対し「猪飼氏説全」と朱書注記がある。これから朱書されたものすべてが猪飼の説というわけではないことがわかる。「恭」なる人は未詳。参考までに、文化元年(一八〇四)刊の濯纓堂本『難経集注』に二箇所「恭按云云」なる按語があり、これは本版を重刊した千田恭のものである。

いずれにしても、猪飼の「読扁鵲伝割解」は、知る限りにおいては『猪飼氏旧蔵書』巻二〇六に収められたものが最善である。

猪飼彦博（一七六一～一八四五）、幼名は安次郎、字は希文・文卿、号は敬所・千一居士。漢学を宮鳳岡に、史学を薩埵蒿川に、儒学を岩垣竜溪に学ぶ。寛政三年（一七九二）に開塾し、京都近辺ほかで講学する。著書は多数。

識語に見える村山士謙と河田氏について。村山維文（一七四五～一八〇二）、士謙と字し、南海と号した。京の医家で、著に『古脈法図解』がある。河田に関しては手がかりはない。ただ、美濃医に河田主計（一七二六～一七九九）なる人物があつて、浅井凶南に学び、その子の大炊守が跡を襲つたとされる。同じ河田姓で、居住地も近く、年代も似通っている。果たして猪飼と交流があつたかどうかは不明。

五、まとめ

以上が『国書』収載の二十三本（刊年不明本一本に該当するものが無かつたので削除）と、『国書』不収の八本、合計三十一本の書き入れおよび旧蔵者の調査報告である。書き入れについては次のようにまとめることができる。

①多量の書き入れがある七本は、『割解』の研究状況、『割解』の影響度、これらを行うかが重要な史料とみなしうる。『割解』の研究は、『割解』だけに止まらず、これらの書き入れの検討なしには始められないことが明らかになった。

②特に、浅井家の正封・正翼・正賛の三代の書き入れを発見できたことは、浅井家の学問方法を研究する上で大いに役立つだろうし、『割解』研究の最上の史料である。

③医家によるはじめての扁倉伝注釈書『割解』が、『割解』以降の研究成果からみるに当時の医界に強い影響を与えた。『割解』本体および書き入れを研究することは、扁倉伝研究においては極めて重要である。

注

- (1) 内容はまったく同じであると書いたが、無窮会図書館神智文庫だけに「路按死病之外又有六不治故治病之道益少矣」(上十六頁)十九字があつて、他の三十一本にはない。この正路注だけが「まったく」に相当しない。
- (2) 三種の版元印「桑陰榭陽藏版」・「桑陰藏版」・「平安文錦堂藏」の意味は未詳。版元の意味だけではなく「その本の製本、または売り出し元を示す場合もある」らしい(岩波書店『日本古典籍書誌学辞典』一九九九年、四七六頁)。
- (3) 小曾戸洋「都下医家名墓散策(三) 奈須恒徳」「漢方の臨床」三五巻四号、一九八八。大塚恭男「奈須恒徳」『近世漢方医学書集成』第四〇冊、名著出版、昭和五八年。
- (4) 小曾戸洋「目でみる漢方史料館(九〇) 多紀元堅自筆校訂の『彙攷』」、『漢方の臨床』四二巻一一号、一九九五、を参照。
- (5) 多紀潤三郎「多紀氏の事蹟」、大空社、一九九八、二二六頁〜二二二頁。多紀元簡(二七五四〜一八一〇)も天明年間(二七八一〜一七八八)に医学館で扁倉伝を講義したことが、『彙攷』の元簡自序および池原雲洞刊『扁鵲倉公列伝』序文に見えている。ともに「難経稀書集成」に影印所収。
- (6) 拙稿「山田業広『扁鵲倉公伝集解』自筆本」「目でみる漢方資料館(一二二七)」(『漢方の臨床』四五巻二二号、一九九八、二〜四頁)を参照。
- (7) 『神宮文庫図書目録』(昭和四十八年訂正影印版)には、資料請求番号四七九の他に、同四七八に「扁鵲倉公列伝割解 安藤惟黄 明和七刊」とある。『割解』がもう一本あるようなので請求してみると、石坂宗哲の『扁鵲伝解』が出てきた。これは、昭和四十八年の訂正の時に『割解』に誤ったものと思われる。大正十一年刊の原版では正しく「扁鵲伝解 石坂宗哲 天保三刊」となっている。また、『神宮文庫図書目録』では「扁鵲」を「扁鵲」、「惟寅」を「惟黄」に誤まり、さらに凶南序文の「平安藤惟寅(平安十藤惟寅)」を「安藤」に誤読している。
- (8) 篠原孝市「浅井正贇『素問記』解説」、『続黄帝内经古注選集』第四冊所収、オリエント出版社、一九八八年。馬継興「『素問標注』『靈枢標注』解題」、『続東洋医学古典注釈選集』オリエント出版社(一九九八)。
- (9) 大東文化大学人文科学研究所「一九九八年度研究報告書(三)」(一九九九年)に影印された。

- (10) 中野三敏著『近代蔵書印譜初編』(日本書誌体系四一) 青裳堂、昭和五九年。
- (11) 卷二〇六と卷二〇七はほぼ同内容だが、卷二〇七は「倉公」下の注文「若夫杭顔楊眉高論強弁欲以与儒齒者多見其志之鄙也悲夫」二十五字が脱している。京都大学附属図書館所蔵(二〇・〇一・イ・二)。「難経稀書集成」に影印所収。
- (12) 『池田蘆洲・田口福司郎旧蔵漢籍コレクション目録』(文教大学越谷図書館、一九九六、二三頁)では、猪飼氏の自筆というが、定かではない。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所客員研究員／大東文化大学人文科学研究所学外研究員)

**Research on “Henjaku Soukou Retsuden Katsukai”:
The Asais, Who Were Descendents of the Author, and
Their Marginal Notes in the Conserved Copies**

Kouya MIYAKAWA

Asai Tonan, who wrote “Henjaku Soukou Retsuden Katsukai” in the middle of the Edo period as a commentary on “Bianque Canggong Liezhuang” of “Shiji,” belongs to the fifth generation of the family of military surgeons of the Owarihan (Tokugawa Clan of Owari Province). His commentary is historically very important.

I researched 32 copies of “Henjaku Soukou Retsuden Katsukai,” conserved in public and private libraries all over the country, and found many marginal notes from 8 copies. Especially, it is valuable that the notes include those written by Asai Masayoshi, of the seventh generation, Asai Masashige of, the eighth generation, and Asai Masatoshi, of the ninth generation. It proves that the Asais, the descendants of the author Asai Tonan, esteemed their ancestor’s work. The research of these notes might explain “Bianque Canggong Liezhuang” as well as the research of “Henjaku Soukou Retsuden Katsukai” itself does.